

IV 広島の南方特別留学生

南方特別留学生とはどのような留学生で、広島で学んだ南方特別留学生の当時の留学生生活や被爆の状況はどのようなものであったのだろうか。また、彼らは帰国後どうなっただろうか。以下、これらの点について簡単に解説するとともに、後半では南方特別留学生と広島大学との関わりについても述べる。

1. 南方特別留学生とは

南方特別留学生とは、太平洋戦争中に「南方」と総称された東南アジアの各占領地区などから招へいされた日本最初の国費留学生である。当時、日本は中国や満州などの東アジア地域と「南方」地域を合体させて、その指導下に「大東亜共栄圏」を築こうとしていた。南方特別留学生は「大東亜共栄圏」の将来の指導者を育成するために「南方」地域から選抜され、一九四三年と一九四四年の二期に分けて二〇五人の若者が来日した。

留学生の人选は主に占領下の南方諸地域の軍政当局に一任されたが、各地の名家や有力者の子弟が多く選ばれたという。派遣前に現地で準備教育が実施され、日本語の授業や厳しい訓練を受けて来日した。

来日後、東京の国際学友会で再度、日本語も含めた準備教育を受けた。国際学友会は、日本語教育の実施や上級学校への進学指導など南方特別留学生の受け入れのための推進母体となった。また、南洋協会（ジャワ）、ビル

南方特別留学生の内訳

	1943年 来日	1944年 来日	計	当時の地域名称
マレーシア	8	4	12	マライ
インドネシア	52	29	81	ジャワ, スマトラ, 南ボルネオ, セレベス, セラム
ブルネイ及び マレーシア	-	2	2	北ボルネオ
ミャンマー	17	30	47	ビルマ
フィリピン	27	24	51	
タイ	-	12	12	
計	104	101	205	

マ協会、フィリピン協会などの地域文化団体が、寮生活や日常生活などの補導教育を行った。翌年、文部省で進学のための試験を受け、試験の成績や本人の希望などを考慮して進学先が決定され、各地の高等教育機関に進学していった。

2. 広島高等師範学校、広島文理科大学での受入

広島大学の前身校の一つである広島高等師範学校（一九〇二年設立）では一九〇五年に中国からの留学生三名を受け入れており、これが広島で最初の留学生であると考えられている。当時、広島高師は西の教育の総本山として全国から優秀な人材が集まっており、その評判により留学生数も増えていった。また、一九二九年には広島文理科大学が設立された。原爆による資料消失等によりはつきりとした数字は得られないが、戦前の広島高師・文理大の留学生数（留学生卒業者数）は二二二名（高師一七八名、文理大三四名）に上る。

南方特別留學生についても広島高師・文理大はその主要な受入先の一つとなり、文科系や教育学を希望する学生を中心に一九四四年度には広島高師に二〇名、一九四五年度には広島文理大に九名（内五名は広島高師から進学）が進学した。

IV 広島の南方特別留学生

広島で学んだ南方特別留学生 (24名)

1944年 広島高等師範学校に進学 (1期生)			
1	ハリム・アブバカル	フィリピン	
2	ホセ・デ・ウングリア	フィリピン	
3	ビルヒリオ・デ・ロス・サントス	フィリピン	
4	サイド・オマール	マライ	文理大進学
5	ニック・ユソフ	マライ	文理大進学
6	ボスタム	マライ	
7	シャリフ・アディル・サガラ	スマトラ	文理大進学
8	サアリ・イブラヒム	スマトラ	
9	ダイラミ・ハッサン	スマトラ	
10	モハマド・タルミディ	ジャワ	文理大進学
11	ムスカルナ・サストラネガラ	ジャワ	文理大進学
12	サム・スハエディ	ジャワ	
13	スークレスト	ジャワ	
14	スディオ	ジャワ	
15	スパディ・ラモノ	ジャワ	
16	モンテットン	ビルマ	
17	チャンチェンボ	ビルマ	
18	パーシルニー	ビルマ	
19	モンウィンチュー	ビルマ	
20	モンモンソー	ビルマ	
1945年 広島文理科大学に進学 (1期生, 2期生)			
(1期生)			
1	サイド・オマール	マライ	被爆死
2	ニック・ユソフ	マライ	被爆死
3	シャリフ・アディル・サガラ	スマトラ	
4	モハマド・タルミディ	ジャワ	
5	ムスカルナ・サストラネガラ	ジャワ	
(2期生)			
6	アブドゥル・ラザク	マライ	
7	アリフィン・ベイ	スマトラ	
8	ハッサン・ラハヤ	ジャワ	
9	ペンギラン・ユソフ	北ボルネオ	

一九四四年度 広島高師に進学 二〇名
 フィリピン三名、マライ三名、スマトラ三名、ジャワ六名、ビルマ五名
 一九四五年度 広島文理大に進学 九名(内五名は広島高師からの進学)
 マライ三名、スマトラ二名、ジャワ三名、北ボルネオ一名

3. 広島での教育、生活と興南寮

広島高師・文理大では南方特別留学生のためにそれぞれ文科興南部、特設学級が新設され特別なカリキュラムが編成された。広島での滞在は四ヶ月から長くても一年半にも満たない短い期間であったが、留学生たちは時々、教授の自宅に招かれたり、日本人学生に対してブンガワソノなどの歌を教えたりと教官や日本人学生との交流があった。

彼らは戦時下の食料不足に苦しみながらも国の代表者として来日しているのだからという自覚の下に張り切って勉強をしていたという。広島市民とも交流があり、食料不足の時であるにもかかわらず留学生寮の近くの隣組が留学生を招待して食事をふるまうこともあった。留学生たちは民族衣装を着て出席し、ラササヤンゲなど故郷の歌を歌い踊って感謝の意を表した。広島で被爆した南方特別留学生のアリフィン・ベイ氏は「広島にいた当時、貧乏で、狭い日本人の家庭によく招かれた。その家には食べるものとして満足になかった。しかし、当時の日本人は、アジアの人々を分け隔てすることはなかった。それ故、こちら（日本人社会）に入りやすかった。」と述懐する。

南方特別留学生のための学生寮を興南寮といい、木造二階建てで二一室あった。広島高師・文理大から現在の平和記念公園方向へ徒歩で約一〇分、萬代橋よみとほしの東詰近くの元安川に面したところにあった。萬代橋のたもとの土手に、留学生たちはよく夕涼みにでて母国の歌を歌い、近所の人々も夕涼みに加わり留学生たちの歌う歌を覚えたという。暑い日には萬代橋の上から元安川に飛び込み水泳を楽しんでいた。南方特別留学生二期生として興南寮で過ごしたテットン氏のミャンマーの自宅には、寮の玄関前で撮影した留学生との写真が大切に保管されていた（巻頭の写真のページを参照のこと）。



広島大学旧理学部1号館（被爆建物）

留学生たちは、この建物の前で1週間野宿をした。

興南寮は原爆により焼失したが、戦後、南方特別留学生と親交のあった花岡俊男氏が「興南寮跡」碑の建立を決定し、各方面へ協力を呼びかけ、元安川の河川敷の管理者と時間をかけて交渉し、一九七六年五月に「興南寮跡」碑が建てられ除幕式が行われた。

4. 広島での被爆

一九四五年八月六日午前八時一五分、広島に原爆が投下された時、広島文理科大学には九人の南方特別留学生が在学していた。広島市郊外の病院に入院していたムスカルナ・サストラネガラ氏を除き全員が被爆した。二期生の四人は広島高師の音楽教室（爆心地から約一・五キロ）で授業中に被爆した。アフィン・ベイ氏とハッサン・ラハヤ氏は物理学の授業を、また、アブドゥル・ラザク氏とベンギラン・ユソフ氏は数学の授業を受けようとした時に、目がくらむような閃光が走り、木造二階建ての音楽教室は崩壊し、留学生は教官とともに建物や落下物の下に埋まった。一期生四人は一時限目の授業はなく、ニック・ユソフ氏、サイド・オマール氏、シャリフ・アデル・サガラ氏の三人が興南寮（爆心地から約九〇〇メートル）で被爆した。モハマド・タルミデイ氏は前夜から寮には居なかった。

被爆した留学生たちは、自らが傷つきながらも被災した広島市民を助け、励まし続けた。約一週間、文理大校庭で過ごすこととなり、負傷者への傷の手当てや食事の世話に奔走した。

5. 被爆死した二人の南方特別留学生

被爆した南方特別留学生のうち、ニック・ユソフ氏とサイド・オマール氏の二名が被爆死した。

ニック・ユソフ氏

ニック・ユソフ氏はマラヤ・クランタン州の貴族ダトー家の出身であった。興南寮で被爆し、広島から西部郊外に避難したが死亡し、他の多くの犠牲者とともに五日市の光禅寺に埋葬された。光禅寺の星月^{とくと}晨人住職は、一九六四年に彼の名を刻んだ回教式の墓を建立。毎年八月六日には有志や広島大学関係者により慰霊行事が執り行われている。

一九八八年には墓前に石碑「由来記」が設置され、「ユソフ君の墓 マレーシアの人 一九四三年南方特別留学生として来日 広島文理科大学在学中に被爆し当地にて死亡 享年二〇歳 謹んで哀悼の意を捧げる 広島大学原爆死没者慰霊行事委員会」と刻まれている。

サイド・オマール氏

サイド・オマール氏はジョホール州の王族アルサゴフ家の出身であった。興南寮で被爆し、生き残った留学生と一緒に広島文理科大学の校庭で野宿をして、行方不明となった同級生のニック・ユソフ氏を捜索するとともに被災

に苦しむ広島市民を助けた。終戦後、東京へ戻る途中で病状が悪化。京都で途中下車をして八月三〇日に京都帝国大学附属病院に入院し、九月四日早朝に原爆症により亡くなった。遺体は当時の市営墓地である南禅寺、大日山に埋葬された。

一九五八年にこのことが週刊朝日に取り上げられ、この事情を知った京都の平八茶屋の主人が、弟の園部健吉氏に墓の建立を依頼し、遺族の許可を得て、一九六一年九月に京都の洛北「圓光寺」に現在のイスラム教式の墓碑が建立された。作家の武者小路実篤氏は墓碑に次のような碑文を書いた。「オマール君 君はマレーからはるばる日本の広島に勉強しに来てくれた それなのに君を迎えたのは原爆だった 嗚呼實に實に残念である 君は君の事を忘れない日本人あることを記憶していただきたい」

毎年九月上旬に広島大学からも代表者が参加して圓光寺にてオマール忌が実施されている。

6. 戦後の南方特別留学生

終戦により多くの南方特別留学生は学業半ばして混乱の日本から母国に帰国していった。戦後、彼らは母国の様々な分野において指導的立場で活躍するとともに、親日家、知日家として日本との友好関係の強化に貢献した。

広島で被爆した南方特別留学生では、ペンギラン・ユソフ氏がブルネイの初代首相を務めるとともにブルネイ日本友好協会の創設や日本との国交回復に大きな役割を果たした。二〇〇一年には駐日ブルネイ大使にも任命されている。ハッサン・ラハヤ氏はインドネシアの国会議員を務めるとともにインドネシア元日本留学生協会（PERS ADA）やダルマプルサダ大学の設立に大きく貢献した。同大学は日本留学経験者が中心となって創設された世界的にも珍しい大学である。アブドゥル・ラザク氏はマラ工科大学インスティテュートの日本語講師を務め、マハティ

ル首相の提唱したルック・イースト政策（東方政策）により産業技術研修生が日本に派遣されるようになる。その日本語予備教育プログラムの責任者となった。アフリック・ベイ氏は外交官、ジャーナリスト、学者として活躍し、国際基督教大学、上智大学、筑波大学等の講師を務めるとともに、インドネシアのブン・ハッタ大学副学長やナショナル大学日本研究センター所長を歴任した。シャリフ・アデル・サガラ氏はインドネシアと日本との貿易の仕事に従事した後、日本企業を対象とした弁護士として活躍した。

広島で学んだ一期生の中では、ビリヒリオ・デ・ロス・サントス氏がマニラ大学総長や元日本留学生フィリピン連盟（PHILFEJA）会長を、またハリム・アブバカル氏が対日賠償使節団渉外部長や神戸フィリピン総領事を務めた。テットン氏はミャンマー政府の中央統計局長、フランス大使、ユネスコ・アジア局長などを歴任し、二〇〇一年に設立されたミャンマー元日本留学生協会（MAJJA）の初代会長を務めた。サム・スハエディ氏はインドネシア外務省に入りブラジル臨時代理大使などを務めた後、弁護士として活躍した。

また、被爆した留学生は自らの被爆体験を母国で語り伝えるとともに原爆展の実施などを通じて平和への思いを海外に伝えてきた。アブドゥル・ラザク氏とベンギラン・ユソフ氏の被爆体験は母国で本として出版されており、ラザク氏の体験については日本語にも翻訳されて日本でも出版された。

広島で学んだ南方特別留学生二十四人の内、確認できるだけでも少なくとも一〇人が戦後、広島を訪問している。被爆五〇年を迎えた一九九五年には、広島で学んだ九人の南方特別留学生（インドネシア三人、フィリピン二人、ミャンマー二人、マレーシア一人、ブルネイ一人）が八月六日に平和記念公園で挙行された原爆死没者慰霊式典に参加した。式典後、興南寮跡碑を訪れて皆で再会を喜びあった（巻頭の写真のページを参照のこと）。午後には広島市佐伯区五日市の光禅寺でニック・ユソフ氏の墓前供養を行った。また、広島滞在中に広島市長や広島大学長も表敬訪問している。翌七日に広島から京都へ移動し、圓光寺でサイド・オマール氏の墓前供養を行った。

7. 被爆した南方特別留学生への名誉博士号授与

二〇一三年、広島大学は前身である広島文理科大学在学中に被爆し、修了がかなわなかった三人の南方特別留学生に対して名誉博士の称号を授与した。

広島に原爆が投下された当時、広島文理科大学には九人の南方特別留学生が在学しており、そのうち七人が奇跡的に難を逃れた。彼らは、自らが被爆しながらも広島市民の救護に尽力し、帰国後、自らの被爆体験や広島での経験を自国で伝え平和活動の推進に貢献した。このことは、広島大学の理念の一つ「平和を希求する精神」の実現に貢献するものであり、留学生のうち、存命している三人に対して名誉博士の称号を授与した(二〇一二年二月当時)。二〇一三年二月から四月にかけて三人の母国を訪問し、授与式を挙行して広島大学名誉博士記をご本人に手交した。

授与式を終えてわずか数ヶ月後、二〇一三年七月一日にマレーシア・クアラルンプール市内の病院でアブドゥル・ラザク氏が亡くなられた(享年八八歳)。また、二〇一四年一月三〇日にはインドネシア・ジャカルタ市内の病院でハッサン・ラハヤ氏が亡くなられた(享年九一歳)。ハッサン氏は授与式の際に「来日して広島大学の学生の前で講演をしたい」と言っていたが、来日直前に健康状態が悪くなり急きよ来日を取りやめることとなった。広島大学では「被爆留学生から見た日本とインドネシアの交流」と題して平和講演会を予定していた。

被爆留学生から見た 日本とインドネシアの交流

講師：元南方特別留学生（広島文理科大学）
ハッサン・ラハヤ氏



講師プロフィール

- 1944年に南方特別留学生として来日し、翌年4月に広島文理科大学に進学。しかし、1945年8月に広島文理大での授業中に被爆。
- 帰国後、国会議員等を歴任し、日本留学経験者を中心に設立されたインドネシア元日本留学生協会やダルマ・プルサダ大学の創設に深く関わる。
- これらの活動を通じて、日本とインドネシアの友好関係の強化に努めるとともに、自らの被爆体験をインドネシア国内で伝え、平和活動の推進にも貢献。
- 本年3月に広島大学から名誉博士号を授与。2005年に旭日中綬章を授章。

日時：平成25年11月1日(金) 13:30～15:00

会場 広島大学学士会館2階
レセプションホール
(バス停「広大中央口」下車)

参加費 無料

対象 どなたでもご参加下さい。

言語 日本語



勉学を志して日本へ留学。そして広島で被爆。
帰国して日本とインドネシアの交流を支え続けてきた
元留学生が、現代の日本人に贈るメッセージ。

主催 広島大学教育・国際室

お問い合わせ先

広島大学教育・国際室国際交流グループ

実現することがなかったハッサン氏の平和講演会のポスター

IV 広島の南方特別留学生



広島大学マレーシア校友会設立会合（2014年3月）

8. 南方特別留学生と広島大学

現在、広島大学では、大学の国際化を積極的に推進しており、その一環として海外の卒業生・修了生や同窓会組織との積極的な連携を通じて国際的なネットワークの強化を図っている。近年は東南アジアを中心に海外同窓会組織の設立が続いており、二〇一五年一月現在、八か国・地域に一四海外校友会が設立されている。

二〇一四年三月に設立されたマレーシア校友会はアブドゥル・ラザク氏への名誉博士号授与式に参加した本学同窓生が中心となってその発足会合が開催された。また、ハッサン・ラハヤ氏への授与式には、ジャカルタ、バンドン、スラバヤ、マカッサルの各地区の校友会長が参加した。その前日にジャカルタ在住の同窓生と各地区の校友会長が集まって、大先輩であるハッサン氏の名誉博士号授与を祝った。このように三人への名誉博士号授与は、海外の同窓生や留学生の連帯感を高めるシンボルや精神的な支えとなっている。

また、海外同窓会の運営に際しては各国の元日本留学生会と

の連携を図ることによって同窓会活動をより円滑に進めるように努めている。南方特別留学生は母国の元日本留学生会の設立と運営に大きく貢献してきた。

ハッサン・ラハヤ氏はインドネシア元日本留学生協会（PERSADDA）の創設メンバーの一人であり、名誉博士号授与式をきっかけとして広島大学と同協会事務局役員との交流が続いている。同協会と密接な関わりがあるダラムプルサダ大学と広島大学は二〇一三年に大学間交流協定を締結した。

また、テットン氏はミャンマー元日本留学生協会（MAJA）の初代会長を務めた。残念ながらテットン氏の存命中に広島大学ミャンマー校友会を設立することができなかったが、二〇一四年三月に設立された同会はMAJAに参加して、同協会から同窓会活動についての助言をいただいている。このように広島で学んだ南方特別留学生がきっかけとなって両団体とは深い信頼関係が構築されており、広島大学の海外同窓会活動の大きな支えとなっている。

おわりに

二〇一五年、被爆七〇年を迎え、当時、広島の中で学生時代を過ごした南方特別留学生の多くが故人となっている。文部事務次官として戦後の教育行政を支えた木田 宏氏は、広島で学んだ南方特別留学生について触れ、「戦時中、大変困難な生活条件の中で、しかも原爆にまで遭ったような、こういう厳しい環境の中で勉強されたにもかかわらず、今（筆者注、一九八六年当時）、アジアの留学生の中のリーダーをしていて、日本での留学体験というのは素晴らしかったということをおっしゃっているのではありません。そのことは、実は日本の研究者だけでなく、アメリカの研究者も、よその国の研究者も…（中略）…大変注目していて、どうして、ああいう条件の中で広島で勉強

した人達がそれぞれの国に帰って、今日アジアの国のリーダーになりながら日本に対して好感をもっているかということの研究課題にしておられます。」と述べ、広島 of 南方特別留学生の先輩たちが築いてくれた絆を深めるようにして欲しいと締めくくっている。

彼らが広島で抱いた勉学への志や平和への思いを忘れずに風化させることなく次の世代に伝えていくことは私たちの世代に課せられた使命であるといえる。

(広島大学教育・国際室(国際センター) 平野裕次)

【参考文献】

- 宇高 雄志 『南方特別留学生ラザクの「戦後」―広島・マレーシア・ヒロシマ』南船北馬舎、二〇一二年
- 江上 芳郎 『南方特別留学生招聘事業の研究』龍溪書舎、一九九七年
- オスマン・ブテイ著、小野沢 純、田中 和夫、山下 勝男訳 『わが心のヒロシマ…マラヤから来た南方特別留学生』勁草書房、一九九一年
- 金澤 謹 『思い出すことなど』財団法人 国際学友会、一九七三年
- 熊平奨学会編 『広島 of 留学生たち…国際交流と留学生…シンポジウムの記録』熊平奨学会、一九八七年
- 倉沢 愛子編著 『南方特別留学生が見た戦時下の日本人』草思社、一九九七年
- 園部 達吉 『被爆者南方特別留学生オマール少年の墓』希望印刷、一九八〇年
- 広島大学原爆死没者慰霊行事委員会 『生死の火―広島大学原爆被災誌―』中本総合印刷、一九七五年